

還船は栄豊丸だったと思いますが、はっきりしません。舞鶴港への上陸は十月一日ころです。手続を終え故郷の岐阜へと列車に乗り、すぐ上の姉が、どうして知ったか京都駅まで迎えに来てくれました。そして一緒に岐阜駅に着きました。岐阜駅のホームまで町内の人が迎えに来て下さいました。そして、声を出さない万歳三唱を受けました。後で聞きましたら、声を出さない万歳をするように通知されていたそうです。

十一、帰国後の生活

私は国鉄職員だったので、帰国の翌日出勤せよとの命に従い、すぐ勤務につくことができました。

家へ帰って見れば戦前の借家はなく、焼けたタン屋根の物置小屋があり、そこで暮らすことになりました。

姉二人は嫁いでいましたので、妹と弟と母と私の四人暮らしになります。まず家を建てなければ

と色々と助けていただき、中二階の家を建てることが一年後にできました。そして嫁をもらいました。生活は順調で、昭和五十二年四月一日付で定年退職し、借地だったので借地を買い取り、家を売って、昭和五十八年四月、春日井市に移住し現在に至っております。

我が激動の青春記

三重県 木村 謙 二

すべてはここから始まった。そして、これがンベリア抑留へと運命づけられたのである。

それは昭和十九（一九四四）年七月、私十九歳の夏に一通の封書が届いた。陸軍特別幹部候補生合格、来る八月十五日、中部一二九部隊（静岡県磐田）に即入隊せよとのことであった。

このころ、戦争は総力戦に突入し、大本営発表の戦果に一喜一憂した。学徒動員、女子挺身隊も

武器増産のため、油にまみれ真っ黒になって働いた。私たちの町内でも、予科練に、陸軍士官学校に、少年飛行兵にと飛び立って行った。私も報国の念に燃え、若い血を漲らせて、遅れてはならじと「特幹」志願にと踏み切った。そのとき父親は大いに賛成してくれたが、母親は顔を曇らせた。

入隊当日、武運長久を願って、「在郷軍人」「町内会長」「愛国婦人会」と大きく書かれた襷を掛けた人々に日の丸の小旗を振って見送られ、励ましの言葉をいただき、私は拳手の礼をしてこれにこたえ「お国のために一命を捧げる覚悟で行ってまいります。後に残った家の者をよろしくお願いします」と挨拶して、住み馴れた我が家を後にした。(復員して分かったことだが、この家も当時の名古屋空襲で一面焼野原と化した)

こうして特幹二期生として初年兵教育が始まった。訓練も厳しかったが、その中で一番印象に残っていることは、一人の兵の銃の手入れが悪いことで、連帯責任で古年兵から往復ビンタをく

らった。口の中が切れ、顔が変形するほど腫れ上がり、痛くて飯や副食物が噛めない、お茶をぶっかけて流し込んだ。顔の腫れが引くのに一週間かかった。

それから四カ月の教育期間を終え、昭和二十一年一月、各戦闘現場に配属された。私は満州第一六六三一部隊・第一一航空情報連隊の新京(長春)の教育隊に候補生としての第二の訓練に参加した。そしてあの八月九日未明、ソ連軍が予告なしで大型戦車を先頭に国境を突破して侵攻してきた。いろいろ情報が乱れ飛び街は騒然となり、鉄道が破壊され原隊復帰はできなくなった。昨日まで友好的だった満人が暴動を起こし、糧秣庫が襲われ、その警備に駆り出された。それから数日後の八月十五日(この日はちょうど一年前、私が入隊した日である)、天皇陛下の玉音放送があった。気を引き締めて、直立不動で聞き入った。雑音が入って余り分からなかったが、戦争終結の宣言であったと思う。このあと隊長から「軽拳妄動を慎

み、日本の復興に努め、くれぐれも単独行動はするな」と訓示があった。そして九月に入つてすぐ関東軍司令部の通達により武装解除され、ソ連軍による混成部隊が結成され、我々もその指揮下に入った。途中、野宿しながら長い行軍が続いた。

戦争は終わった。これからどうなるのか、日本に帰れるのか、シベリアに連行されるのか、不安と期待の交錯する毎日であった。行軍の途中、民間人が開拓団の人々かに出会った。みんな疲れた表情で、女、子供が多く、着のみのまま重い足を引きずっていた。婦人は頭を丸めて男の服装をしていた、ソ連兵の暴行を防ぐためだと。また実際に犯された婦人が自決したと聞かされた。何とも言いようのない敗戦の惨めさ、悔しさを味わった。

十月になると寒風を肌感じる気候となつていた。幕舎での生活に別れを告げ、兵舎に移動することになった。愛河では物資の積込みと機械の解体作業をした。噂ではウラジオ経由で日本に帰る

のだという。我々はこの冬はここで年を越した。

翌年四月「東京ダモイ」と騙されて、ソ連軍の有蓋貨車に一両に三十六人積み込まれた。中は上下二段に区切られて、扉の中央に穴をあけて小便ができるように板で囲ってあった。扉は外から施錠されていた。僅かな扉の隙間から外が見える。列車は西へ西へと走っている。予期していた通り「ダモイ」の夢は断たれた。一日じゅう走り続けると思つたら五、六時間も停車しているときもあった。その間に食事の分配、用便をするのである。貨車の中は何もやることはないの、相変わらず食う話でもちぎりだ。「ぼたもち」「大福餅」が一番よく登場する。中には「俺は帰ったら百姓になつて、真っ白い飯を腹いっぱい食うんだ」と言う者もいた。

列車は二十日間くらい走つたであろうか、ある山の中で降ろされた。そこから歩いて白樺林の中のうす汚れたイランスク収容所に着いた。周囲は鉄条網が張り巡らされ、四隅には監視兵が立つ櫓

が建っていた。一日休んで最初の作業は便所造りであった。以前の便所が狭いので、新たに穴を掘ってそこに板を渡して一度に三十人くらい用を足す。周囲には囲いも塀もない全くの露天である。朝などはまことに壯観である。尻を丸出しで並ぶ。出す物が丸見えで、恥も外聞もない捕虜ならではの情けない光景である。

我々の本業は森林伐採である。毎日二人一組でピラー（二人挽きの鋸）、タポール（斧）を持って片道一時間かかって現場に行く。先頭には監督、最後尾には銃を構えた歩哨がいて「ダワイ、ダワイ」とせき立てる。仕事は直径五十センチくらいの樹木を二人挽きのピラーで切り倒し、枝を払って二メートルくらいの長さに切る。枝は焼却する。監督から「大木の下敷きになって死んだ者がいるから気をつけろ」と、少しロシア語のできる仲間から説明があった。馴れない作業と空腹で思うように仕事は捗らない。監督は、ノルマを達成した者はパンの増配があると言うが、達成は容

易ではなかった。

食事は一日三五〇グラムの黒パン、野菜の少し入ったスープで、これでは重労働には耐えられない。そこで我々は作業の行き帰りに、食べられるアカザ、キノコ、ユリの根などを取ってきて塩茹でして腹の足しにした。その際、年配の古兵から毒キノコの識別法を教わった。それでも体力のない老兵たちが栄養失調になる者が続出して、死んでゆく者が後を絶たない。ある日、私の班で起床になっても起きてこないで、もう冷たくなっていった人がいた。この人は以前伐採で何回か組んだことのある、新婚四カ月目で現地召集された私と仲の良い戦友であった。私は後に残って吊りたいと思ったが、死体の処理は軽作業班がすることになっていたので、後ろ髪を引かれる思いで作業に出た。帰ってから聞いた話では、遺品の中から、生まれたばかりの赤ちゃんを抱く奥さんの写真が出てきた、衣服の中に縫い付けてあったそうだ。実の我が子と一度も対面することもなくシベリア

の土と化したこの戦友、さぞかし無念であったろう、悔しかったでしょう。

このころより軍隊の階級章も外され、上官でも「〇〇さん」と呼び合い、作業も同じようにすることになった。食料事情も改善され、良くなってきた。作業にも馴れ、要領を覚え余り疲れることもなくなった。

ある日使役に出され、それがソ連将校の家の当番であった。薪割り、水汲み、掃除などの雑用でした。家族の人とも親しくなり、いろいろご馳走になった。余った食料（黒パン）を持ち帰ろうとすると、「ダメ」とマダムが許さなかった。この使役は皆も狙っていて、私も最初で最後であった。

我々の中にはいろいろと特技を持つ人がいる。元役者、踊りの師匠、少し浪曲をやっていた人、歌の上手な人、これらの人が中心となって演劇班が組織され、必要な小道具も自分たちで作り、衣裳やメイクもなかなかのものであった。娯楽の少

ない殺風景な収容所にも華やいだムードが漂い、休日的一天、我々を大いに楽しませてくれた。

またその一方では、アクチーブと称する連中がやってきて民主運動が展開された。「日本新聞」なるものが配布される。これはソ連側から発行されるもので、当然共産主義を称え、これに反動的な態度を示すと、吊るし上げられたり「ダモイ」が遅れると言われた。夜勉強会があり、「インターナショナル」、「赤旗の歌」など歌った。我々も要領よくこれに参加して、ひたすら「ダモイ」を待った。

そして遂に来た。昭和二十三年六月、全員「ダモイ」の一報が入った。今度こそ真正正銘の「ダモイ」だった。一人ずつ名前が呼ばれ帰国の準備を整え、また有蓋貨車でナホトカに向かった。しかし喜んでばかりはおられない。もろもろの調査があり、その結果、ここナホトカからまた奥地に連れ戻されるという不安な日々を過ごしたが、何事もなくようやく高砂丸に乗船した。真っ青の日

本海を舞鶴港に向かった。やがて懐かしい祖国の山々が見え、感激は最高潮に達した。「万歳！万歳」と歓声が上がる。

船が岸壁に近づくと大勢の人が小旗を振って迎えてくれた。タラップを一步一步降りると、医師団と並んで白衣の看護婦さんが目にとまって「ハッ」とした。その姿は新鮮で美しく、まぶしかった。軍隊から抑留生活の四年間、男だけの世界で生きてきた反動なのか？ 忘れかけていた私の青春が甦ってきた。もう一度振り返ってその看護婦さんを見た。

思えば、この激動の青春時代を耐え凌いで生きてきた。この貴重な経験は、帰国後の私の人生に何一つ恐いものはない、どんな苦境に直面しても、困難にぶち当たっても、これを跳ね返す「バネ」をこのシベリア体験が私に教えてくれました。

戦後五十有余年を過ぎた今日でも、忘れようとして忘れることのできない悲しい出来事、かつ

て苦楽を共にして、共に祖国に帰ることかなわず凍土に眠る我が戦友、心からのご冥福を祈ってやみません。

あとがき

私、大正十四年生まれの七十八歳、家内に先立たれ、ただいま一人暮らしである。毎日午前中に家事を済ませ、午後アトリエに入って絵を描きます（二、三時間）。二三元という全国組織の絵画の団体に所属し、毎年、東京都美術館にて作品の発表をする（その後大阪、名古屋と巡回）、一年の成果がここに集中する。会場で、全国から集まってくる仲間たちと作品の批評をする、時には芸術論に花が咲く、至福のひとつときである、この刺激が大切である。そして、これこそ今の私の生きる道である。ここで私の作品の「テーマ」は、シベリア抑留の熱い思いを大作（百三十号）のキャンパスにもがき苦しみながら、全力投球で描き続けております。